

拜啓

秋涼之候、益々清安に添はせられ奉賀上候。

之書方より、不意に忘れ天の如し、絶え不ぶ音に祈

呂ぎ、失禮多飛、平に成座想、と下夜再新上候。

昨年十月四日初は、ナブスプレック、ウラン致候より、痲痘起。

危殆日と共に加はり、年末の便所、とこれ此世の人には何る

まじと^{アキラ}、中飛候が、今日尚ほ生所、存すは、たしかに、

皆々様の滋けキ、所後ぬに、生歸に候。再生の恩は、心

に銘し、かんこめすしし候。涙を以て、至平而禮

申上候。

四顧下れば、世界系玉、人煙が見える處、生洗鬱の家

吹かざるは、非す候。哀れなり、女銀に塵り、悲しき、幸一

耳に滿ち候。三乘無在、猶如火宅、とこゝろ、有者

持音の世の中、候、何なり。

殊に、満州事件の長びと、喧ひて、受しら、打撃の甚しき、

中、細育同胞社会、候と、思うけ、すぬらせ候。まことに、女

心を許さ、いづの秋に候。

かゝる折に、私は、いつまを、し、皆株主の、之を、所と、存し、と

患

私に療養院に有りて、殊燈の滅の産業に候。予は學女の
許に預かりて通宿せし。学校がすめは、父を尋ね母を見
舞しし。雪に燈火のまたし頃。雪ふかき林鹿の跡を。一哩
歩ほど徒歩するが、護法の曰課 ~~あり~~ 存候。

この春は、不時の用意に新ちぎため、村の人、または友人たちに
甚からぬ迷惑を相可申候。慚愧骨にしめ候。かゝるこ
とは ~~お~~ 一 繰返さぬやうに致しなき存候に候。

宵二日の生飯屋の上、連中は離散の境況に候が、観ずれば
新島は、端ぎ何んぞ、夏宿んの二食を調料しうろのみにて、
燈日燈座、二振臥の ~~あり~~ 存候。

また遊りし其病根を訊ねば、過去十年方、已れを忘れし、
夫を助らんがための看護にいそしめ、過去の結果、急性肺
炎とすうて、ぶつたふれた。吹波に候。

かゝることは考とめじらせば、そぞろ ~~あり~~ 散 ^り の一法は、唇頭に上
ぼすべし ~~あり~~ 候。去りとてまた、日皆様に ~~あり~~ すまな ^い 候。
なとと思へば、遊返 ~~あり~~ 候。熱い涙が流り、のみ ~~あり~~ 存候。

しからば、赤高鹿に ~~あり~~ 候。九天の雲晴れと、馬車は全快い
たし申候。山間の舟は ~~あり~~ 相玉候ふ。私 ~~あり~~ 候。元年付。

端の松風凱とて、奮起とうあかし。ふは益之強健に、十二とし
 の名を正し、平候百、右、左、他事、心おん休め、年を新上候。
 可愛い子には、旅こそまけれと。讓名は今、社より、働き、ついで、
 学び、ついで、働かんとして、苦学、才、行の、旅に出立、りたせ申候。可
 し、二年の、短は、トルドク院長、ドクター、ハイズイの、宅に候。
 拙業は、紐帯に、おど、舊職に、復す、か。た、か、ずんば、母、夫の、ため、
 子の、お世の、ため、どん、在、働、き、し、いた、し、あ、す。口、と、深、刺、た、る、こと、を、申、出
 候。

秋凡にひそり、かかれを、み、け、し

やせたり、花の、河、け、れ、た、ら、な。 古歌

私は郡立病院の人となり、淋しく、苦し、患者を、慰め、し。また、慰
 め、ら、れ、し、と、養、病、可、は、候。こ、う、し、隠、忍、自、虐、後、年、妻、子、が
 近、ひ、に、来、り、果、し、い、日、を、待、た、考、へ、候。

挿句。

昭和七年九月 日

おびし、や、病、庵、に

妻、元、光、彦

殿

玉、机、下